

# 協同労働の歴史と今後を まとめにかえて

石見尚（協同総研顧問／日本ルネッサンス研究所）



人間らしい働き方を追求してきた協  
同総研

協同総研は働く人びとが雇われないで自  
主的に従事し経営参加する企業として、  
ワーカーズ・コープが認知されるように、過  
去10数年、研究活動と法制化の推進運動を  
続けてきました。

これは人びとが人間らしい働き方すなわ  
ち人間の尊厳のある働き場を創るためであ  
りました。職をもつことは人間の証明であ  
りますから、障害者、健常者、男女・高齢者・  
若年者を問わず、そういう職場の実現が社  
会の基礎でなければならないという思いか  
らであります。それには人びとが協同労働

で支えあう協同組合や、名称は何であれ、同  
様に労働を通じて民主的参加の保障される  
事業体が必要になってきます。

## ワーカーズ・コープの歴史

日本でのワーカーズ・コープの歴史はか  
なり古く、1910年前後すなわち明治末から  
大正期に始まっています。しかし現実に大  
衆運動としては、まだあたらしいのです。

第1期は第2次大戦後間もなくです。1950  
年前後、戦災で家を失った市民、外地からの  
引き揚げ者などが、自分達の手で就業機会  
を創り出しました。

第2期は1960年代から70年代にかけてで  
す。工場労働者たちが生活賃金や労働条件  
の改善を激しく要求し、会社は解雇や偽装  
倒産で対抗しました。倒産工場では労働者  
の自主生産が燃え上がりました。これは、19  
世紀後期から20世紀30年代にかけてのいわ  
ゆる労働者生産協同組合に発展するかに思  
われました。実は大阪がその先鞭をつけた  
のです。阪神工業地帯の中堅の優秀な工作  
機械メーカーの職場で、1970年代に始まっ  
た労働者の職場管理と自主生産がそれです。  
しかし全国からの支援カンパにもかかわらず、  
労働者による工場の自主再建の試みは  
長くはもち堪えることができませんでした。

工作機械は全産業の手足となる大事な部門であります。その機械を用いて消費財を作る生産メーカーの発注がなければ、仕事がなくなります。また銀行は売れる見込みがなければ、資金を融資しないのです。ワーカーズ・コープは地域生活者の需要と結びついた業種でなければ、成功の可能性は低いのです。

この当時、私の友人の一人が、阪神の労働組合のセミナーに呼ばれて、「ワーカーズ・コープを起ち上げていきませんか？」と言いましたら、「あかん、あかん。大阪の労働者は先の見えない出資のためにお金は出せへんで。」と反論されました。それ以来、私は関西ではワーカーズ・コープづくりは見込みがないのではないかと思って、大阪から足が遠のきました。今日、10数年ぶりに大阪に来ましたが、大変驚きました。ここに参加された皆さんが自然発生的にいろいろな市民事業を多様な組織形態で、地域のあたらしい事業に自主的に取り組まれている活動実態の報告を受けまして、まったく認識を新たにしましたし感動しました。労働者協同組合あり、企業組合あり、NPO 法人があり、社会福祉法人あり、有限会社あり、障害者の社会的事業所があり、苦しいなかで頑張っておられることがよくわかりました。それらの事業組織がネットワークを組み、緩やかな市民的公共圏の形成を展望しておられます。30年前の工場労働者の自主生産とは、役者も舞台も様変しているのは、まったく予想以上のことでした。

話をもどすと、第3期は1980年代です。東京、神奈川、千葉、埼玉県下で生活クラブ生協の組合員のなかから、ワーカーズ・コレ

クティブが統続設立されてきました。業種は主として食の分野です。安全な食べ物の供給として弁当屋さん、パン屋さん、レストラン、クッキングスクール。そこで働く女性の子どもの保育所、一人暮らしの高齢者の家事介護や給食活動、宅配、それから不用品の再利用など、生活密着型の自前の協同労働組織が誕生し、継続できることが証明されました。まさに女性の生活技能を生かした自立労働の時代の幕開けとなりました。

これとは別に、全日自労(全日本自由労働組合)から派生した労働者協同組合によって、病院の清掃、公園管理などの衛生関係、製靴、電気設備、タクシー、配送、その他地域生活に密着した事業組織が広がりました。

次の第4期は90年代です。80年代の生活密着型ワーカーズ・コープ運動の延長線上に、高齢者介護など福祉事業の協同労働が急速に発展しました。また今日の報告にもありましたように、障害者の自立のための協同労働組織が意識されてきて、それが次の21世紀の初期の社会的協同組合の問題提起になってきました。

#### ワーカーズ・コープの今後

それでは、21世紀の最初の10～20年はどうなるのでしょうか。私は、協同労働の形で廃棄物の領域を環境産業にしていくこと、つまり3R(リデュース、リユース、リサイクル)を事業化するワーカーズ・コープが登場してくると予想しています。今日の関西地方の活動報告のなかに、すでに廃棄物の資源化という公益性の高い仕事に取り組んでおられる例がいくつかありました。大量生産、大量消費、大量廃棄という資本主義の



ンソシウム」と言う、協同労働の知識集約センターつまりネットワークのかなめとなる調整センターを持つことが必要になってきます。既存の協同組合の連合会や「中央会」のような同質の系統組織ではなく、第3セクターの多様な組織を結びつける独立性を持った二次的支援組織であります。協同労働の法制化がそのはずみになると思います。今後とも皆さんとともに地域と社会の変革を進める協同総研のご支援をよろしく願います。

構造的矛盾を逆手にとって、内部から構造改革するのがワーカーズ・コープであります。すでにアメリカ、中南米、ヨーロッパで、3Rを掲げた新しいワーカーズ・コープが出現してきました。それは就労とコミュニティの再生とが結びついた運動となり、イギリスでは緑の町おこしの広域的運動に発展しているところもあります。これからの廃棄物の3Rの仕事は、単なるゴミの回収、焼却、埋立てというヨゴレ仕事をディーセント・ワークにするものです。パソコン・プリンターの特許カートリッジの例のように、一種の情報産業であって、知的財産権を含む産業領域のテーマなのです。

今日、われわれの事業活動について、ハイリスク・ローリターンという話が出ました。実情はその通りだろうと思います。協同労働の仕事がそれにふさわしい報酬を受けるには、まず既存の古い固定観念を変えること、次に知識集約時代と人間組織の多様化時代に対応した柔軟な組織に自己変革しなければなりません。その一つとして、イタリアでは「コンソルチオ」、また英語では「コ